



善知安方忠義傳 第三輯 一

1305 14















西條重太郎  
高純  
實の伊豫掾  
純友の末子

抱朴子曰く蟾蜍千歳るまが  
頭上小角あり腹の下丹書あり名て  
内芝といふ能山精を食ふ

人得てこまを  
食ふ仙術  
家小  
取用て  
霧を起し  
雨を祈り  
兵を  
避け  
自ら



一種内芝と  
称する者  
山中  
あり小兒  
掘得るを  
あはが  
知し是を  
食へば長生  
不老亀鶴と壽  
同く然れ  
とも壽へくは





あまの  
えびまの  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの

山脇の養女  
耶麻媛  
伊賀次郎  
実ハ伊賀次郎  
教潔ガ子

而伏兎者亦難乎

善夫第三卷之一

四



上野赤城山の麓の兎見  
雲龍九郎

木蘭為男粧  
出戌遠征  
而人不知也

可謂難矣耶麻媛不其易其貌

善夫第三卷之一

四







善知安方忠義傳第三輯卷中總標目

第十回 高純難を避く深山と淵る

第十回 肉芝仙の術英雄を試く  
良門高純山寨小會を

第十一回 奸夫姦婦痴情小迫は  
苦肉の一計千代松と喜

第十一回 武久助酒樓小糸遊と挑む  
計小衆かく還て彼と謀は

第十二回 荷助山中の異人小逢ふ  
里見溪川小少年と救ふ

第十二回 豪富恩と謝く里見と飲待  
藝ハ身と極入指術の功驗

第十三回 寒士和漢の珍器小駭く  
媛が謀計その圖小當は

第十三回 女兵を繰く雄怯を試む  
危難を避く十代田小舎る

第十四回 英士忽地小曉る夢物語  
東國の乱と往事の語説

第十四回 耶麻媛婿不足を駐む  
婦女の驍勇雲竜と挫ぐ

通計十回二十條目的畢

善知安方忠義傳第三輯卷之二

東都

松亭金水編次

第十一回

高純難を避く深山と淵は  
賊れ一計断岸の葛梁

公羊傳のそく。父誅を受ぎとて。子讐を復のん可なり。父誅を受て讐を復ふも。双を推れ道なり。と違ハ父さる者罪あり人の為小誅せらるる。そを仇とて討つ。法の縦さぬ所なり。母小先亡平親王將門を以て西海小逆威と振ひ。伊豫掾藤原純友多。私怨小募りて其の國を願けん。そ朝敵ある故官命を受て進發せる。諸將の功小勳礼平らぎ。そ悉く誅せらる。さよその子孫とて。その身僥倖小誅戮を免くれらるを欲び。僧法師ともあり。君恩の辱き成るべし。然ハわすして平太郎の弟の















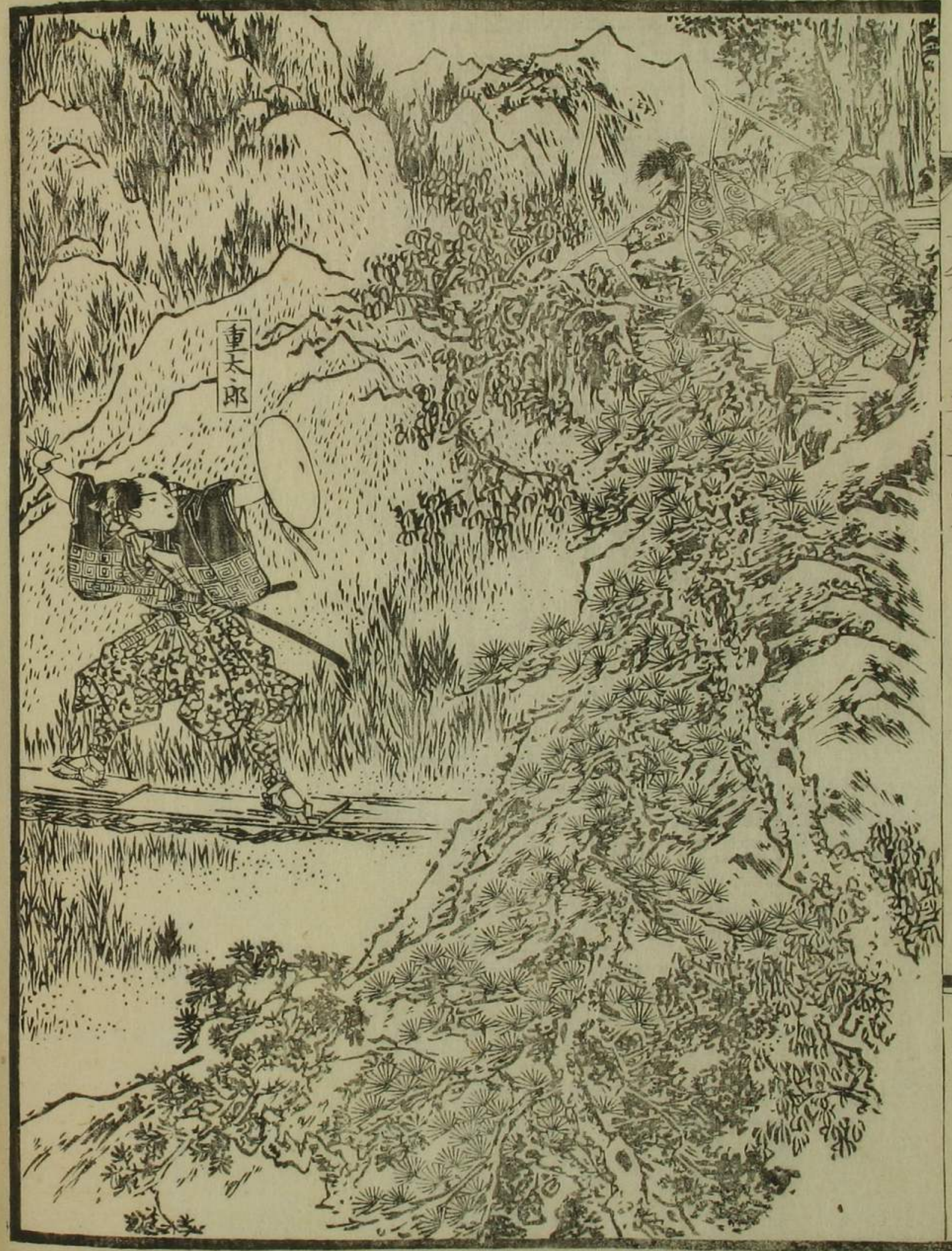




程の甲斐ありき身少くはあぐく小父純友が大志を稟嗣ぎせ小出んと  
 ひもより必熱あるは仕出しく志を濟し果さば尸を曝し江湖上の人の唾  
 小ぢらんより。今大の深山小廬を捨て死生存亡知る人のうらんを倍  
 あらゆ。猛き心もあ管小弱くくうまひ傍に廣らるる芝生少く  
 梢林小春の日の恵こけけや嬰兒の拳とる早蕨のつぎ生後る小心  
 著き。伯夷叔齊の兄弟の首陽小入る食物なく蕨を採り命を繋げ  
 故事も今眼のゆくり。此処小件の東西わら天高純が一命を断る  
 ざる所あり。とと今かく頃刻の飢を凌ぐ小修し。とち秋ひく首  
 と廻ら。かの早蕨の穂を摘採。恣小食ひ。か危急の飢を防ぐ小是  
 り。形く心神元小復さる。何う必まのあふき。ととより頻小路を早  
 めく心裡の五七里も歩ららん。推量も。険しき路の足抄らる。必往

先づ小もえらるぬ小樹立を巡りて。豈計らんや是より前  
 深き溪ゆくその底の碧こころりて眼小及む幅のちを十間わたり左右  
 をるまこと赤雲の高く聳え往べき方より魯般が雲の梯る。向ひの  
 岸小到る。つらる。険隘九曲の歩も極き。小挂ら。瀬も小難き  
 ともかく誘ふ心も今更小途を失のて詮方あり。甚時乃湛右手の方十互  
 ちり来てえま。何者架こ。けん藤小葛めれる物を組織げ。その  
 幅の二尺わたりと。此方の廻り向ひの岸へ引渡してある。をるつけ  
 此処も。正賤む。の邂逅。往來をあらと。危ふけ。とも見ぞ。あ  
 天の資と。ち。教び。足踏うけ。七八歩を。ち。わらぬ。溪の。渡り。わら小  
 ゆら。右を。左り。小揺め。き。その危き。て。つ。傳へ。唐土の天  
 台山の石梁。その徑。十丈。截岸。絶壁。あり。と。崩。ち。朽る。慮。な





高純

重太郎



けまぶ。杏小。心易り。人。深溪。小架。以。獨木。橋也。あま。あ。の。道。下。と。別。を。休  
心。半。の。願。し。と。自然。良。も。戰。慄。く。名。の。す。と。ど。死。生。命。あり。天。小。あり。時  
運。小。任。し。と。渡。小。若。下。と。心。わ。沉。め。死。を。願。す。て。徐。々。と。その。中。間。速。打  
渡。り。ん。左。右。を。る。小。山。勢。四。方。小。を。覆。ひ。て。不。覺。小。衣。を。濕。ま。く。空。小。知  
ら。ま。ぬ。微。雨。小。齋。汗。津。く。と。肌。小。寒。ま。る。夏。畦。の。農。夫。小。異。な。く。ば。折。り。し  
件。の。葛。梁。の。前。後。の。語。小。忽。然。と。頭。は。出。る。人。の。打。拾。の。四。天。中。の。物。を  
纏。ひ。輕。衫。の。下。に。足。を。著。し。首。小。の。藪。を。り。て。編。る。笠。小。政。中。を。兼。し。と。冠。り。  
各。弓。矢。を。携。え。て。旗。く。と。互。ら。の。獵。夫。小。あ。ら。ば。山。賊。と。の。ち。ど。あ。る。死  
景。勢。あ。る。が。声。を。う。け。て。や。よ。旅。人。の。葛。梁。を。忍。ま。る。日。あ。く。渡。る。大。膽  
不。敵。の。僻。者。あ。の。山。寨。あ。る。統。領。の。阿。闍。梨。太。郎。が。憐。れ。の。命。令。汝。が。下。り  
膽。太。き。壯。者。を。濟。て。麾下。小。あ。さ。ん。と。設。け。し。梁。の。別。臆。を。例。さ。ん。為。の。計

畧。あ。る。小。今。汝。と。と。渡。る。その。別。殺。の。因。り。知。る。ぬ。今。より。大。王。の。麾下。小。屬  
ま。や。その。返。答。と。は。ま。欲。し。若。否。わ。く。あ。く。對。殺。さ。ん。奈。何。し。の。ひ。て。持。し  
弓。小。矢。を。う。ち。番。の。膏。ん。と。い。さ。下。高。純。前。後。と。ん。と。山。賊。の。り。と。十  
四。五。人。の。各。弓。と。持。し。進。退。無。き。折。小。ま。さ。く。一。回。小。の。梁。と。放。さ  
ま。ま。が。脱。る。樹。の。わ。さ。り。と。信。と。沉。吟。し。左。右。の。手。と。揚。げ。各。努。り。卒  
示。ふ。せ。て。天。下。の。街。道。あ。く。知。り。り。か。る。深。心。を。踏。分。て。獨。淵。る。去。の。梁。小  
中。紹。く。危。う。き。身。あ。ら。ば。な。り。難。く。と。と。渡。る。と。も。この。身。と。措。小。所。在  
ら。ば。僥。倖。あ。る。阿。闍。梨。と。は。は。は。統。領。我。ど。死。生。を。決。の。技。者。と。は。は。は  
と。は。は。争。う。麾下。に。あ。ら。ば。望。む。所。小。い。と。異。義。也。あ。げ。小。の。ひ。け  
と。ど。渠。が。更。小。弓。折。せ。ば。その。返。答。小。虚。言。あ。ら。ば。汝。が。佩。る。その。兩  
刀。の。鈎。習。小。減。之。著。吾。們。小。適。共。ま。さ。し。然。ら。ば。何。小。何。と。い。ふ。身。を



道まん計策をうとて一歩も退せぬ射殺さんと向ひの岸より釣罾の端を  
 捕へ高純が傍近く抱共る高純手早く釣を掌小受けのく在  
 下備らん。汝為此の両刀を脱せん后小心のま小刃刺と做さん計較を  
 還て此方小艇のあんど。進退谷の中途より射殺さん小倍はへ疾く  
 逆共しきうさんく相く両刀を被釣罾小を縛く罾の岸ある岸越  
 と手繰く雅なく己が方小収め弓小をげさる矢を外し乞く此方へ渡り  
 来よ。左右小披きをわゆる高純は十四五歩のく向ひの岸小勝  
 る危あきと言語絶く諭る小物あふ。折く此方の樹間より一隊  
 の人馬突出以真先小諫す。虎責し書し幟をわ。五人敷の凡と五  
 十むり。その中矢小遣し。後足小誇り陣羽織を物と著し。白銀造  
 りの大銀刀を横とふ。高と六の一隊の魁首と見え声揚げ。遠奴を我

前へ突出せし。以より唯と軍械高重太郎が右左隊圍に彼処あはれ統  
 領ゆ何圍梨太郎の人の相く統領小見参し。主従の約をあせ。と或五  
 らとく重太郎の身及ぶと身を起し傍近く歩と傍り。傍へ心小是改  
 ど。いまと言葉を突せぬ。何圍梨太郎は高純をみるより内し。馬と走下り  
 傍も貴者小潮平の天狗童る小在し。吾と認り。向も此方小微  
 笑し争く見忘さん。尙小馬と盗ま。把返とよと農民們が憑と小因  
 く无様を。あぬ。下足下が力量勁捷賊あ。中心小只管感ず。所あり  
 折もあ。今一回相見え。あ。山寨の統領ゆありける  
 くの人を何圍梨が引把く傍る人の隣小貴者小勇名耳の根小止。是  
 どの心傍く。あ。在しが日外の拳初を。祝く知り。その橋の互小。互  
 と。如何小。貴者と初め。あ。小寨小招き。在下ホが大幸と其



次の日心利する軍械を遣りて貴きを勅静と窺ふる事。事実の定る事  
 られど暴か起る一家の艱に知縣を討て宅火をうけ。五退しつと告る事  
 より初て街道をゆく小徑伏ありて遁まぐる。この深山の路のまを瀾り  
 多し心定めてその性先の所へわらふ人の他は少く然も此の所小窺ひ居  
 いて葛梁と波り多し此如と小計らふ上備る梁を踏みて波らる餘所還り  
 多し見ゆひむらの別教ゆく真の英雄ありて憑りて大捐りて。一と摩  
 下の賊為小の合め時相國も定めおきて借て貴きと疾る小果て  
 此処へ来りひの葛梁小臨りけり別教の所作小彰りてぬ。願ふ今今し  
 くと寨小至り多し脅力を扶け掲りて大慶とこと加てあつと折此山の  
 統領は在下と小三個小く在下の弟三位小居りたり然る小園に麾下を集め  
 且賊宝の在納と掌る所小貴きとこと兼謀りて餘の二統領小の口合せ

重く用わたりてその人の所虚言ありぬ。面色小くも察せりて更小管心  
 ありさぬ女とどど吾高資がまうけを以て始りて知らる。一身の素性西  
 海南海小名を棄てて。純友君の子ありと也然る小今一身を安く措か  
 所ありしと改藤子の賊の群あり。所名を千載小遺さんと朽惜き次  
 牙かり然いあとも是より後斥て往き方あり。上野ある鬼石を  
 訪ひ恙あつく系持た。彼処小あつ高資の禰けり。系國の弟一日小早  
 く身小副んと。愿りて欲きと事とど。ゆり彼処へ往りて。とことまこと定るあり  
 べ。まの木の阿蘭梨が初小任せと寨へゆりてその容を看且その餘の二統領  
 つある者小うそくわらふ人願ひある身小誰小まこと周小若とありと。小  
 忽地小らち笑とく在下さる。能日あり。樞機ありぬを初。まの愛させ  
 り志争り。疎略小ありべき宜ふ所小悉く憐れ小願ふ。僥倖と頼り伴ひ多し



とつその言偽をぬを滅つて阿闍梨太郎の軍械を携えたる彼両刀を  
自身重太郎小遊与つてのりて然ることを帯させり畢竟底を  
知しぬをりて互小遊あつらんを欲くの所為なり悪くおのひひ七とて前  
小立り紫内なる重太郎高純の阿闍梨太郎が迹小著き軍械を小園繞  
せしとて漢を廻り板を攀り性と一里をりりわて草葺のありあがり大  
厦の梁棟を並べ建列せしとて塞あり衡門の色小至とて門成る軍械三  
十人をもととるより走り出る路の傍小拜伏を阿闍梨太郎の命とて  
右門内小入ける小方右の弓矢を列せぬ衣の牙大鉞おどその間小建を  
て非常を警む備とせりかて中門と見しきありとを入しと番の軍械  
肘より張て出入を改むその嚴重ある景勢の依内小も勝りしと重  
太郎のこと等の体を心裡小感トつ頼の廣書院小うち通る此処はとて

皮小剥ぬ丸木を以て柱とあせり昔天智天皇のいま皇太子とつり丸  
西征小従ひて筑紫ある朝倉と小行宮を管さる人材木鹿皮を劉らんと  
そのまゝ小建らとけとてあまは木本の四所といひまゝ木丸殿と移る遠は  
を帯り黯黒ある自然の圓木を敷材小用わらん故の名とてとて元来仁  
君少く庶民の疲弊を思ひ百務めて質樸小従ひらん夫とあてとて表裏  
小のいもとてとて謀叛を獲り治まると世を獲り非道の素懐を遂へん  
て財用不足とる小より小剣を俾とて良民の資財を掠む大悪无道  
皇天頼小罰とるてとて將時逆威を揮ふ小至とる

第十二回

肉芝仙の術英雄を試以  
良門高純山寨小會也

下件そのまゝの阿闍梨太郎あせりの命いのちとて真まことの方かた良よを早はやめり性さがつるがあま雲時くもとき



わりてこの廣出院忽地騰彫と芳小巾わらび雲小巾わらび雲わらび雲  
 然波誰時かたみのどく物の色さいろええこぬまま落暗おちありけき重太郎ちゆうたろうい  
 怪あやしこ未の頃いまある小遠小四方の黯黒くろありく深ふかの故ゆゑありん存ぞ但  
 波起の浪間なみが嶽たけ常とこ燃もまつ時ときして煙けむりの覆おほふゆわらんとその故ゆゑ由よし  
 知るしてああけましと元もと来きた剛毅ごうぎあるのななまま些ち日ひ怖おそるる色いろをを四よ色しきをを見  
 まり在ありまする所ところ小傍こわらあるの縁えりのの電でん光くわうののどど再また三さん回かい察さつ然ぜんとと火ひをを奈  
 まるる小このの心こころ裡うち小こ遠とほかかのの山やまのの火ひ気き元もと漢かんとと焼やむむるるののややんん備  
 然ぜんとと砂すな石いしをを飛とべべしし心こころ獄ごくももままことことがが為なりり崩くづれれとと及およびび遠  
 八は不ふ測そくあるる禍わざはひのの来きたるるのの身み構かまへへをを依よりりぬぬままでで心こころをを竭くつしし身みをを道  
 向むかふふ所ところ要えんありり堅かた唾つばをを飲のみみ寝ねふふ折おりり颯さつ記きるるとと又またええるる影かげしし  
 下したののべべりり火ひ屋や裡うち暴あつ小こ揺ゆぎぎりり荒あきき波なみとと小こ漂たふぶぶととままにに瓦か落おちちとと鳴な

礮たけなめめきき棟むね深ふか折お長なが押おし一ひと回かい小こ落おるるどどととああままにに遠とほいいまま大おほのの燒やけけ  
 小こ瓶びんひひちちとと小こ湯ゆ小こ猛もうとと心こころ小こ胸むね裏うらききてて膝ひざとと直ただしし何なに方かたへへ避ひききとと便  
 小こ瓶びん方かたととええままりり折おととわわととのの丈さかおおをを十じゅう尺せきををかりかり頭かぶのの大おほきき十じゅう圍ゐ小こ巾  
 餘あまりり車くるま輪りんののどどきき眼まなこのの光ひかりをを散さん徹てつとと人ひとをを射いるるああままにに何なに者ものとと瞳ひとみをを定さだめ  
 克かつるる小このの瓶びん極ごくめめてて蝦えび蟻あまととわわりりけけととどどのの小こ深ふか幽ゆう谷やととりりととわわりりは  
 大おほ蟲むしのの居ゐるるままののままのの化けのの所ところ為なりりとと眼まなこをを放はなすす刀やいばのの欄らん小こ手てを  
 ううちちららけけくく白しろ眼まなこるるまま下した件けんのの大おほ蝦えび蟻あまののどどとと同どうききてて紅べにのの音ね諸しよ共ども小こ火ひ輪りんをを吐  
 きき高たか純じゆん目めががけけくく四よ脚あしをを徐ゆる々々動うごきき發はつつとと重ちゆう太た郎らうのの橋はし速すみききりり  
 近ちかくく一ひと刀やいば小こ首くびをを劈ききき目めかかりりののええせせんんとと心こころ蝦えび蟻あまのの方かたかかりり左ひだり右みぎをを見  
 るる暇いとまななししまま下した左ひだり手てのの力ちからをを推おししききままりりままりり阿あ闍あつ梨り太た郎らう客きやく人ひとのの小  
 瓶びんににままるるととのの掛かららとと顔かほをを向むかふふ小こ瓶びん蟻あまのの煙けむりとと消きええとと何なに方かたよりよりのの



頭あたまはとけんしんげん忽たち然ぜんとくその色いろは白しろ髪かみの老ろう翁うとす。年とし齡ねん二十にじゅう三さんのいとま遅おそく  
 き青春せいしゆんと西せい個こす延えん小せう五ごるが青春せいしゆんの度ど袖そでの袷あはせ衣えを身み小せう纏ちんひ陣じん羽う織お小  
 小せう袴こはかと著まし魏ゑいゆき金かね作つくるの太たい刀とうと横よこ左さの手て小せう金かねの采さい配はいと持もつ  
 けり。まゝ老ろう翁うの態たいの皮かわをつ造つくり筒つと袍ぽう小せう見み目めまま小せう袴こはかと著まし。いいとま長なが  
 ろある太たい刀とうを帯おび人ひと年としと老ろう翁うと健けん多たる昔むかし活かり小せう岐ぎ及およぶ武ぶ内うちが傍そばもわく  
 大だいわんわんと必かならずひままとるま草くさ紙しとも十じゅう人にん可かる。その左さ右うと後あと小せう路ろ跡せきを重ちゆう太  
 郎らうの太たいの機き關かんささ心こころ中ちゆう小せう解かいしやぶぶ物ものをもも心こころ可か断たんん身み構かまへて  
 飛とりけり。阿あ周しゅう梨り太たい郎らう進しんみり。貴き志しが魂たまああく小せう尋じゆん常じょうああと己おのれ知しれど  
 大だい王わうの己おのれ言こと業ぎやうのこゝろこゝろ親おやをお名なのな稱せうとと試しさんさんとと箭やより時ときの髪かみと示し  
 且かつ大だい王わうの奇き術じゆつをお大だい蝦しや蟻ぎと現あらひひ屢りん試しさんさんとと所ところ実じつ小せう貴き志しがが大だい大だい夫ふう更さら  
 小せう疑ぎひののああるるささああるる因ゆにに股こ肱うの老ろう翁うをを伴ともひひ五ご出しるる。ささるる小せう因ゆにに種くさのの

怪け矣いも一いち回かい小せう鎮ちんする。ああととり大だい王わうが奇き術じゆつを想かひひ知しるる。いいとまひひりり彼か方かた小  
 うち對たいひひ在あり下した若わ心こころと獲とる所ところの英えい雄ゆう即すなはちの老ろう翁うと先せん頃ころも言ことををとく  
 潮しう平へいの農のう夫ふうが亦また小せう善ぜん馬まあるる盗たうとと心こころが。ああのの人ひと迹あとを逐おひひ追おひひ。その馬うまと奪うば  
 返かへししる。その折せうの働はたらきを在あり下したささるる小せう及およぶ故ゆゑのの心こころ正せい察さつへへ入いるる。と計けい板ばん  
 たりし申まを變かわりりく見けん参さん入いるる。すすはは願ねんひひ重ちゆうく用ようひひ味あじ方かたの兵へい  
 と闘たたかうう針はり策さくををあありりと慇いん懃みん小せう深しんとと被か青せい春しゆんの志し及およぶる。頼たのみみ徐じゆ々々  
 と重ちゆう太たい郎らうが傍そば近ちかつたた什し麼なん汝にのの妻つま玉たまの潮しう平へい小せう成せい長ちやうよりよりのの岐ぎとと先せん  
 何なに人ひとああるる。その名なと何なにとと天てん狗こう童どう子しととのの譯わけ名なああるる。頼たのみみ名な業ぎやうとと  
 ばて重ちゆう太たい郎らうの取とれをを攻せめめ今いま義ぎららるる。その許もとのの山さん寨さいのの大だい王わうととはは折せ他たのの姓せい名な  
 をを継つぐぐと欲ほむむるる。老ろう翁うのの己おのれ姓せい名なををままううひひ小せう在ありり。吾われのの魔ま下げ小せう属ぞくささ  
 先せん後ご上じやう下げの差さ別べつももわわるる。然しかああるる程ほどのの許もとがが為なるる。則すなはち孫そん家けありり。ああと



その後を辨へざる。と少しも動せぬ面魂のつ小日尋常ありぬを奈一面  
 と和らげ詞を昇へ遠い過るも。在下の故親王平将門が遺腹稚名々  
 平太郎今心寨の統領として自身その名を將軍太郎良門と辨はる。  
 さとふ多くの麾下を従へ強盗利をあらはるといども。遠く一時軍用を  
 集め且兵士を懐けんとする所為あり元来の志ありぬり。さか父將  
 門が一世の事蹟近き世のこゝろあはれ説話小日想ひまゝありん。天下と有  
 の大志を發し。既小下總の後裔那磐井の郷小大内程をも遠管あり。さ  
 官軍の為小滅さんと遺憾あることありといふ。在下のまゝ嬰兒あり。その餘  
 の姉あり滝夜叉のま物の要小五りのありぬ。從卒時の稚を遊ん或ハ隱と  
 或ハまゝ。擧ぐる日あり。お小放りその名と漸く小打滅ハ在下成長りて  
 ありと恙ハ儲を是る伊賀守小會ハ阿闍梨大郎が子兒を濟ん。と且暮

小父の志を嗣人と願ふの他あり。固く去る年内芝仁小。その初を授るん或  
 とまらあはれ以用ハ進退必没心のまわく。その奇瑞ハ炳然とことん元軍旅小  
 初をのこ行ひく。賜へるありん。然る小姉あり滝夜叉のその名小ハ佛堂小  
 深く飯ハ髪を薙如月と号し亡父の後世を吊ハ在下とも出家小ありと  
 稚きより諭し初めたりけし。在下一向兼引を終小ハ肉芝仁の初とて  
 その心を蕩り併糸を損へ誅殺小共。頼小還俗して諸共小父の遺志を  
 果さんとて下總相馬の古儀小務る策を廻らせり。大宅太郎光国ハ頼  
 信方の嬖臣あり。竟小そのとて嘆か。大お小若く相馬と發ふ折節勢の在  
 りせし。姉ハ我ハ小負ハ自害してす処小死を固く在下ハ將憤ハ猶  
 以前小百倍。直小素懷を遂んとすこと。寡ハ衆小敵とて人殺を集め  
 將節を圍ふ。と一挙に勝利を濟ること。良將の計策あり。憤とて將



勢と國らへ隈小起らば弊とんと境小架てゑるが如し故小まが股肱耳  
 目の良と濁る小倍とあり。屢人の諫め小より。怒りて押して時と俟り。在  
 下ダ身の未歴の粗初のごくあり。さへあの秘密を告る小放るの足下心中  
 の是非と論ぜぬ味方おせぬの懐ひがごとく備蓄おとあり。正寮と生くるおまら  
 帰き。重太郎が顔うち成る。おひ入る景勢小重太郎へこととひよひて  
 漢面喜悅の色と顯り。居丈高小ちのり然おありける。嗟悦おとくと。菅澤  
 あへ進まより。借の貴をの故親王の子お在まよりや。在下の南海小第  
 と裏りせ。伊豫掾純友が二男あり。既小父と父と契諾將門君一天の主と  
 なりゆり。純友の閉白太政大臣小任せんとありける。さる小周く東は南海  
 一時小發き。兵端小霎時天下と漂せり。と微運小く本意と達せ減て  
 後の世小潛まり。土民小雜りく姓氏を隠さ。今時ありて國らへも環り。今奉

つる悦び何とこと小若人。少く良門心裡小十二分の悦び。合こあが。小今  
 の世の人心小の波影あり。元来互小面貌と知るさあ。ねば然りとも。更小  
 信とあり雜。畢竟吾ハ將門の子なり。よ小渠もま。純友が子ありとい  
 欺くりのうあふ。と半信半疑の心あり。采配と藤小五く実小河に  
 ぐ。あ。互小父の亡具が。導きより奇遇あり。め。吾小正く種々の証拠と  
 大き物あり。既小亡父の髑髏とさ。肉芝化より。授る。壇上小祀り。日夜  
 小拜を足下純友の子と。証ありや。同け。高純茶へ。在下の純友  
 の子ある。己と小知。昨日ま。父と事へ。西條九郎高資ある。  
 の。実の家臣の幼稚ある。在下と。子と呼ぶ。彼。潮平小潜る。季末期  
 小寄る。を。助め。己が素性を知らぬ。但系國の二考を。手自。進。し  
 を。云。の。才。小。より。仲。系。托。小。把。り。持。て。上。野。草。津。の。を。ある。鬼。石。左。近。と。の。人





重太郎

あやり太夫



いさむ太郎

おきり門

重太郎山寨  
將軍太郎  
良門小會



りの。家小五選せりしごと。渠恙あり性。や否や。いまその便宜も知ら  
ば故小在下とてより。彼家小到らんと山まごをうら巡る。此のて死  
小及びり。ささば死とてさきりの爰ふあねど高資小虚言のあへり。次  
と嘆く良門傍の狭間小排。は証第一筋をねれ。把て前小むき。あの葉の徳り  
りふれ。よ小高純一觀看より。遠く何とんと小在る。石淵之け。と小とを。此  
葉ハ件の西條九郎高資が所持も。地故小昔未小深り。その名字と徳り。ん  
と嘆く良門然あり。明日六昨日晝の程。暴小一天暗くなり。物のまを。別様  
バ遠くある怪果あへん。とさへあへる。小何とも知。次時小あの征葉虚言より。  
落ける。その様小あ羽と。覺り。老二三枚。費きあり。爰をひて。是なる。伊賀守  
が遠く正々。鵬をへんと故る。あど引。活る。少き。渠再の。み。あの葉の。名。ま。み  
故純友が家の忠臣主君の滅ぶ。雨小及び。死す。わ。び。あ。け。り。今。も。存

今ある。あ。ま。困る。あ。い。人。あ。る。を。と。怪。と。語。り。今。足。下。が。話。説。小。故。人。の。  
王を。詳。お。せ。り。と。又。を。ば。高。純。の。の。葉。より。一。禍。の。端。を。発。き。一。故。縁。を。精。く。語。  
ま。今。より。志。を。綱。に。滅。び。る。家。落。と。再。次。興。さん。の。貴。さ。の。相。小。虚。言。を。か。ぶ。こと。  
より。心。を。二。小。く。計。策。を。廻。り。へ。と。い。ひ。込。む。る。作。と。え。ん。今。ま。は。然。然。と。物。も  
の。ま。あ。り。け。る。羽。の。形。を。改。め。搖。ぎ。出。恭。く。徳。手。を。著。信。の。君。の。故。伊。賀。守。純  
友。君。の。子。を。坐。け。り。懐。り。や。在。下。ハ。伊。賀。守。太。郎。教。久。と。い。ふ。者。あ。り。伊。賀  
守。二。郎。徳。共。小。先。君。小。仕。へ。奉。久。く。鴻。恩。を。稟。り。の。敢。あ。く。滅。亡。の。か。へ。り。後。小。至  
り。遺。感。小。徳。比。子。あ。る。重。太。九。乃。孫。也。も。橋。の。遠。保。小。徳。せ。り。も。ひ。ひ。一。故。初。り。の  
他。の。子。も。あ。る。と。い。ふ。この。翁。が。徳。の。著。情。情。乎。生。ん。と。い。ひ。と。り。紙。中。小。落。後。に  
と。い。ふ。小。徳。と。あ。り。一。浪。園。ら。び。良。門。若。小。身。参。あ。り。心。中。大。小。喜。び。に。徳。を。今。日。迄  
保。護。を。け。小。名。も。り。け。る。来。歴。を。兼。り。と。い。ふ。紛。ひ。も。あ。り。ぬ。夫。故。善。時。也。見。第。



不和ありあひる。彼美女小春とて。秘に口名さへ重太郎と呼びし。見  
 牙の三方ありし。ついで我他へ渡さぬ。流きし。心慮今更に感激せり。老の突  
 高資子とて。人育まゆ。い日餘堂の談。後日あり。雅く成人し。ひる。  
 自他の僥倖何事。う。ことお過んと。とを。さ。さ。日忠臣高資が。使者の為  
 身を殺み。慈をを念おひ。け。め。といひ。涙。瀾。然。と。辱。放。く。眼。の。黜。之。老。の。突  
 い。妙。く。ま。け。り。高。統。の。彌。り。傍。を。傍。の。汝。の。伊。賀。壽。と。名。突。小。父。君。が。股。肱。の。臣  
 拘。む。ら。ぬ。老。の。夜。啼。と。て。餘。所。あ。が。う。時。小。西。海。の。統。友。と。さ。い。の。時。の。伊。賀。壽  
 と。と。る。豪。傑。あり。官。軍。日。集。が。為。し。を。さ。く。碑。易。く。う。の。人。を。吹。流。し  
 とい。わ。り。け。り。が。名。へ。主。従。と。世。の。縁。端。を。い。今。環。り。合。て。亡。父。君。小。見。え。糸  
 ら。ん。心。地。を。と。と。ん。懐。り。や。し。互。小。手。と。把。り。懐。舊。の。涙。亦。時。を。移。し。け。り。か。る  
 折。り。良。門。が。筒。小。弁。絨。為。小。分。付。へ。調。理。さ。せ。る。酒。散。整。ひ。り。と。持

お。と。び。各。々。地。小。田。孫。と。て。蓋。を。さ。り。揚。る。者。下。伊。賀。壽。教。久。の。顔。も。あ。た。今  
 日の歡會。ま。り。その。坐。を。定。め。ん。少。良。門。を。り。ん。大。王。と。高。統。を。一。の。統。領。何  
 周。梨。太。郎。と。三。の。統。領。已。の。年。老。人。物。の。要。小。五。と。い。は。れ。外。位。不。あ。り。備。降  
 の。わ。ん。と。死。商。燦。の。席。不。加。り。の。こ。う。餘。の。万。事。大。王。と。二。統。領。の。名。不。任。ひ。と  
 決。し。ま。し。め。ひ。け。り。各。々。の。談。話。を。べ。い。と。て。その。並。列。坐。あり。終。夜。酒。宴。し。て。一  
 日。早。く。志。を。遂。ん。と。國。を。小。移。り。後。糸。持。が。所。持。る。統。友。の。家。系。を。餘  
 の。口。に。や。雄。々。と。し。性。あり。と。も。久。く。處。女。の。手。小。指。入。の。過。り。し。つ。へ。う。ひ。ひ。く  
 鬼。石。小。至。り。や。ま。う。老。ら。ぬ。中。の。便。宜。を。察。せ。る。こと。所。要。あり。と。し。草。紙。為。小  
 捺。付。へ。折。々。と。し。を。探。ら。せ。け。り。と。い。鬼。石。左。近。の。鄰。士。小。と。も。き。その。取。違。り。の。様  
 構。へ。小。目。小。も。や。老。ら。ぬ。方。三。町。四。面。を。う。り。不。逞。を。極。く。高。橋。を。架。し。瓦。屋。瓦。葺  
 利。と。聲。を。き。第。四。の。男。と。百。人。ま。り。命。を。殺。せ。り。と。い。喜。小。他。人。の。由。入。を。行。は。し。り



不於此年滅也。我々も其の如く。我々が有るや。我々を討つる。以て空しく月日を送る  
 けり。案下再生再死。我々が其の如く。我々が有るや。我々を討つる。以て空しく月日を送る  
 思義を以て。不より。初に疾より。犯して。婢女等。と。諸共。小庵厨の。責。焚けり。其の  
 あり。澤原の。深雪。歌の。湯水。を。以て。其の。心。を。入。り。し。祿。を。瑞折。玉。禱。の。由。變  
 甲斐。を。打。拾。ひ。脊。を。洗。ひ。熱。さ。温。さ。將。と。小。志。下。水。を。運。び。ま。た。と。焚。け。目。か  
 漆。の。燭。さ。修。へ。て。信。失。不。世。の。間。と。不。忘。ら。べ。心。を。著。て。物。さ。ま。と。正。祿。の。七。号。の  
 客。を。入。る。小。つ。け。年。さ。も。の。ま。は。二十。小。是。ら。ぬ。處。女。親。の。許。あ。る。あ。る。富。富。の  
 左。ま。と。心。の。易。く。す。れ。程。の。友。が。ま。と。集。め。て。拵。び。試。み。し。り。我。々。も。あ。れ。と。可  
 嘆。り。笑。ひ。真。だ。も。傾。あ。る。薄。命。に。け。故。を。離。れ。て。遠。去。り。珍。姫。の。身。と。か  
 と。ば。と。吾。們。を。主。親。と。も。あ。り。教。ひ。て。長。き。月。月。の。且。暮。小。心。を。配。る。老。い。と。よ。深  
 雪。の。と。も。の。下。の。心。づ。も。あ。れ。性。あ。り。ね。と。事。に。秋。ぶ。客。目。せ。ん。其。時。小。滅。を

畏むしや。と。表。を。り。い。優。し。ぬ。小。る。る。り。の。う。う。節。々。雅。願。め。り。と。以。掛。て。  
 渠。と。泣。さ。る。奉。功。あ。る。折。々。あ。る。心。の。最。前。湯。女。と。も。把。り。嫉。心。と。現。れ。あ。る  
 由。浦。平。治。め。の。餘。の。老。婦。の。顛。末。在。り。が。ま。さ。小。者。も。必。く。疑。ひ。の。心。の。晴。し。容  
 あり。と。猶。こ。も。と。も。日。疑。ひ。て。執。念。く。胸。を。焦。さ。り。速。莫。便。あ。れ。處。女。と。今。さ。り  
 何。地。へ。遣。ら。ん。速。と。一。封。の。青。春。あ。る。と。と。配。り。て。安。堵。さ。を。我。日。ま。清。き。心。を。  
 著。い。さ。ん。の。と。と。沈。吟。し。遠。近。と。あ。く。索。む。と。も。彼。小。見。あ。る。此。小。非。と。友。人。の  
 猶。小。け。長。後。ま。て。祥。し。う。ね。が。時。の。到。ら。ぬ。の。あ。り。と。その。侍。不。違。を。程。小  
 正。祿。の。人。と。も。衣。服。烟。灰。心。を。著。只。管。小。懐。き。と。む。む。と。糸。拵。の。心。を。感。ト。い  
 益。他。事。を。仕。へ。けり。と。小。千。代。松。の。正。祿。が。情。あ。り。く。母。の。誓。光。慈。と。討。心。程  
 十二。分。の。款。び。あり。と。その。上。の。源。賢。非。事。理。の。徒。者。と。なり。く。世。家。す。と。也。世。不  
 ま。こ。も。の。重。下。の。彼。非。事。理。小。雙。復。の。と。を。告。る。つ。つ。を。り。款。び。日。の。み。らん



疾く杖を曳りぬや。と心俟ひせしむるほど。今の何地小在りけん。のちの末の末の末。松  
 まの千代松のことよりして。て手習と讀書の心を修むるに。兵竹のまこと。讀  
 書の道は好むる性にて。且蔭千代松と机を並べ互に励むと。正禄のつる毎のつ  
 歎びく早く大人小あまよ。夫婿とてなり。初孫の顔と見えあはば。必ひのわらうと。  
 手と必くことと引伸ひ必ひぞ平生おせしむる。糸柱のまこと。稚きより。の書と  
 と物の本讀むと。夜好む。父高資が傍にあり。女小仙げあは兵書とさ。お  
 覚えしともあり。然とて暇ある折。毎小千代松兵竹が手な。ひま。机のを  
 小く傍りて。る小兩個のり。得小稱あ。字の書ぎ。なの善う。つれ。成る。つるの  
 あ。つれ。何とも。お。在り。今。別。漆の重。あ。の。悪。き。と。餘。所。小。人。と  
 心の信。あ。た。小。仙。げ。り。と。兵。竹。が。手。と。持。て。開。け。り。書。せ。り。べ。い。遠。い。ま。と。有。筆  
 法。ど。と。身。小。骨。を。ろ。も。教。ふ。ま。と。つ。直。朴。あ。る。兵。竹。が。娘。と。て。小。必。ひ。の。指。揮

の隨。え。と。わ。く。文。字。の。昨。日。小。復。る。見。事。さ。小。正。禄。の。つ。る。あ。の。頃。の。一。際。目。五。手。迹。の  
 上。達。未。憑。と。歎。ぶ。る。と。小。兵。竹。の。目。と。糸。柱。が。教。う。よう。を。具。小。骨。と。つ。備。也  
 ともある處。女。と。と。助。め。う。り。と。必。ひ。つ。る。あ。う。と。土。民。の。子。小。い。わ。ら。ひ。今。う。後。也  
 とも徒ひに。教へ。を。受。よ。し。女。児。を。論。し。つ。る。糸。柱。を。二。あ。き。り。の。小。必。ひ。と。つ。疎。略  
 小。あ。き。り。千。代。松。の。ま。こと。見。考。の。こと。と。見。聞。か。つ。け。り。糸。柱。の。つ。と。憑。き。處。女。う。  
 通。遣。と。つ。本。の。文。字。問。へ。ば。事。さ。何。々。と。二。音。三。音。初。を。さ。と。撫。て。教。う。は。り  
 一。こ。ろ。り。お。ひ。の。も。小。わ。ら。う。う。い。と。穉。心。小。あ。ま。あ。れ。老。と。常。小。貴。ひ。教。ひ。他。の  
 由。あ。け。と。つ。糸。柱。也。その。怜。惻。と。必。心。小。當。て。着。の。如。く。慈。し。と。物。事。の。つ。の。こ。あ。う  
 だ。髪。礼。と。つ。梳。り。衣。視。と。つ。脱。換。を。洗。ひ。濯。ぎ。ん。俵。を。を。り。つ。と。伝。束。小。物  
 ま。原。あ。び。千。代。松。の。ま。こと。実。の。材。と。つ。必。ひ。做。り。て。親。と。ま。あ。の。く。心の。底。と。つ。あ。わ。け。り  
 秋。の。兔。の。毛。の。一。息。を。り。も。隔。つ。と。つ。あ。う。り。ひ。と。と。と。と。と。糸。柱。の。父。高。資。より。



其へらとて主家の系圖遠く一大事と人共後心一ツ小秘あき少く由早  
 く重太郎小環と今人違ふとすべし父が本を由とす難くまに後人由と素性  
 と知るうあて坐をらん。と浪作の災難と主従父子が哀別難苦の父  
 が恙ありぬと立退りひら。その便宜と辨へ此処小飄蕩日を送る子との道  
 小わねども甲斐ある老の女子あり鬼石の石を隔り二十里餘ありんと  
 夫とくも相違あり故処不在とあり。性安否を訪て難きあか  
 り小易けとて然もあは將の画幅あり。身のある果の厭ふ不足りねと系圖  
 を違ふとてまにたてし日冥土へ往て身ありのそと處女乳の平生小  
 胸の痛ゆけり

善知安方忠義傳第三輯卷之一



